

一九九九年一月一〇日

霊的な戦いと祈り（三）

エペソ人への手紙第六章一八節～二〇節

エペソ人への手紙第六章一八節～二〇節には、それに先立つ一〇節～一七節に記されている霊的な戦いについての戒めにつながっている、祈りについての戒めが記されています。これまで、エペソ人への手紙全体の流れを見ながら、霊的な戦いの中で祈りがどのような意味をもっているかについてお話ししてきました。その要点は、神の子どもたちの祈りは、基本的に、父なる神さまの「みこころの奥義」の実現と完成のために祈るものであるということでした。

一章八節～一〇節では、イエス・キリストの十字架の死による罪の贖いの恵みにあずかって神の子どもとされている私たちに、さらにあふれさせてくださった恵みについて、

神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時が十分に満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。

と書かれていました。このように神の子どもたちに示されている父なる神さまの「みこころの奥義」の実現と完成のために祈ることに、神の子どもたちの祈りの特徴があります。

\*

このことは、第六章一九節、二〇節で、パウロが、

また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

と言って、自分のための執り成しの祈りを要請していることの中にも表わされています。

パウロは、自分のことを

私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。

と述べていますが、その務めは「福音の奥義を大胆に知らせること」であると言っています。この「福音の奥義」は、一章九節、一〇節に記されている父なる神さまの「みこころの奥義」のことです。

このことから、「福音のための大使」として栄光のキリストから遣わされているパウロの視野の広さが見て取れます。

罪の自己中心性からは、「他の人はどうであつても、自分さえ幸せであればよい」というような思いが生まれてきます。その「自分」が、もう少し拡大して「自分の家族さえ幸せであれば」というように家族や、「自分の国が繁栄しさえすれば」というように国家になることはあつても、基本的に自分が中心であることには変わりがありません。

パウロは、この「自分の」を極限にまで拡大して「自分の存在する宇宙すべてが調和のうちにあるようになれば」と考えているではありません。そうではなく、イエス・キリストの十字架の血による罪の贖いにあずかつて罪の自己中心性から解放された者として、父なる神さまの「みこころの奥義」を中心として考えるように変えられています。

その場合、「自分」は自分のものであり、「自分の家族」も自分のものであるけれど、「自分の国」までは自分のものとは言えず、みんなのものである。まして「自分の住んでいる世界」は自分のものではなく神のものである、というような発想ではありません。二章一〇節に、

私たちは神の作品であつて、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

と記されているように、何よりも自分自身が神さまの御手の作品であると告白しています。

コリント人への手紙第一・六章一九節、二〇節には、

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖靈の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

と記されています。

神の子どもたちは、自分自身も、自分の家族も、自分の国家も、そして、自分が住んでいる世界のすべてのものも、神さまの御手によって造られたという意味で、神さまのものであると理解しています。また、そうであるからこそ、すべてのものが、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められる

という、父なる神さまの「みこころの奥義」のうちにあると理解しています。そして、この父なる神さまの「みこころの奥義」が実現することによってだけ、罪の自己中心性によってもたらされている、自分さえよければと考えるところにある「自分」と「他の人々」の間の分裂を初めとして、「家」と「家」との分裂、「国」と「国」との分裂、さらには、「人間」と「自然」の分裂などが、最終的に解消されると信じています。

その根本にあるのが、この前も引用しました、コロサイ人への手紙一章一節、二〇節の、

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

というみことばに示されている、御子の血による贖いが、造られたすべてのものを包んでいるという事実です。御子の血による贖いを通して、すべてのものが神さまとの和解による平和と調和のうちに存在するようになります。

そして、神の子どもたちの贖いのことは、これに続く二一節、二二節で語られていて、

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

と言われています。つまり、父なる神さまの「みこころの奥義」を中心として福音を見えますと、御子イエス・キリストの十字架の血による罪の贖いに基づく福音は、神さまがお造りになつたすべてのものを包み込み、その回復と完成を実現するものであるのです。その宇宙大の贖いの中に、エペソ人への手紙

一章四節、五節で、

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによつてご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

とあかしされており、ローマ人への手紙八章二九節で、

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くくの兄弟たちの中で長子となられるためです。

とあかしされている、私たち人間の回復と、父なる神さまの子どもとして、御子イエス・キリストに似た者となることの完成があるのです。

\*

エペソ人への手紙六章一八節では、

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によつて祈りなさい。

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と書かれています。

ここでは、「すべての聖徒のために」祈ることが戒められているだけであつて、父なる神さまの「みこころの奥義」の実現と完成を祈り求めるようにとは書かれていません。しかし、「すべての聖徒のために」祈ることは、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められる

という父なる神さまの「みこころの奥義」の実現と完成を祈り求めることと深くつながっています。

そのことは、今日のお話も含めて、これまでお話ししてきたことからお分かりのことと思いますが、改めて、前回も少し触れましたローマ人への手紙八章一九節〜二二節に基づいてお話ししたいと思います。そこでは、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであつて、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしているこ

とを知っています。

と言われています。

このことばは、造り主である神さまの御前に罪を犯して墮落してしまった最初の男女に語られたさばきの宣告を背景にして記されています。創世記三章一六節～一九節には、

女にはこう仰せられた。

「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを

大いに増す。

あなたは、苦しんで子を産まなければならぬ。

しかも、あなたは夫を恋い慕うが、

彼は、あなたを支配することになる。」

また、アダムに仰せられた。

「あなたが、妻の声に聞き従い、

食べてはならないと

わたしが命じておいた木から食べたので、

土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。

あなたは、一生、

苦しんで食を得なければならぬ。

土地は、あなたのために、

いばらとあざみを生えさせ、

あなたは、野の草を食べなければならぬ。

あなたは、顔に汗を流して糧を得、

ついに、あなたは土に帰る。

あなたはそこから取られたのだから。

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。」

と記されています。

ここには、人間における「産みの苦しみ」と、ちりに帰らなければならぬ人間の「虚無」が語られています。これに対して、ローマ人への手紙八節一九節～二二節では、全被造物の「虚無」と「産みの苦しみ」が語られています。この二つの「虚無」と「産みの苦しみ」は、神のかたちに造られている人間が、造られたすべてのものを治める使命を委ねられていることにおいてつながって

います。

どういうことかと言いますと、創世記一章二八節に、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

と記されていますように、人間は、造られたすべてのものを造り主である神さまのみこころに従って治める使命を委ねられています。ですから、被造物は神のかたちに造られている人間をかしらとして、人間との一体性のうちに置かれています。それで、人間が罪を犯して墮落したことによって、人間との一体性にある被造物にもその結果がおよび、「被造物が虚無に服した」のです。ということは、かしらである人間が、神さまとの関係において本来の姿を回復することがあるなら、やはり、人間との一体性において、被造物たちも回復されることになるわけです。その意味で、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

……被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。

と言われています。

また、エバに対するさばきとして、「産みの苦しみ」が増すことが語られています。しかし、そのさばきのことばは、恵みのことばともなります。というのは、それに先立つ創世記三章一五節では、人間を罪へと誘った「蛇」の背後にある存在であるサタンに対して、サタンが「蛇」を用いたので神である主も「蛇」をお用いになって、

わたしは、おまえと女との間に、

また、おまえの子孫と女の子孫との間に、

敵意を置く。

彼は、おまえの頭を踏み砕き、

おまえは、彼のかかとかみつく。

という、さばきを宣言されたからです。

これは、神である主が「女の子孫」を用いて、「蛇」の背後にある存在であるサタンに対するさばきを執行されるという宣言です。

ですから、エバに語られた、

あなたは、苦しんで子を産まなければならぬ。

というさばきのことばは、それに先だつて語られている「女の子孫」として来られる「贖い主」の約束を信じる者にとつては、「産みの苦しみ」の中にあつてなお「贖い主」が与えられる望みを示すものです。ローマ人への手紙八章二二節では、この「産みの苦しみ」にあつての望みが、人間との一体性に置かれている全被造物にも適用されて、

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

と書かれています。

このように、御子イエス・キリストの十字架の死による罪の贖いを通して全被造物をご自身と和解させていたださる神さまのご計画の実現と完成には順序があります。まず、神のかたちに造られている人間が罪を贖われて、神の子どもとしての栄光の姿に回復されなくてはなりません。

\*

エペソ人への手紙でも、この順序は踏まえられています。すでにお話ししましたように、一章二〇節〜二三節では、

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つからであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによつて満たす方の満ちておられるところです。

と言われています、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められる

という父なる神さまの「みこころの奥義」がイエス・キリストにあつて、原理の上で実現しているだけでなく、実際に私たちの中で実現し始めていることが示されています。その実現の第一歩は、神の子どもたちが、「キリストのからだ」である教会において一つに集められていることであり、そこに、栄光のキリストが宿つてくださることです。

ローマ人への手紙八章一九節で、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

と書かれているときの「神の子どもたちの現われ」は、栄光のキリストのからだとして一つにされている「神の子どもたちの現われ」のことに他なりません。

この意味での父なる神さまの「みこころの奥義」のことが、エペソ人への手紙三章六節では、

その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

と書かれています。これに続いて、七節では、

私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。

と、パウロが受けた使命のことが告白されています。

そして、六章一九節では、その自覚の下に、

また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。

という、執り成しの祈りを要請しているわけです。

「福音の奥義を大胆に知らせる」ことによって、人間的な要因の違いなどから生まれる、さまざまな分裂と反目の痛みと嘆きのうちにあった人々が、御子イエス・キリストの血による罪の贖いによる神さまとの和解の上に立って、栄光のキリストのからだである教会に結ばれ、イエス・キリストにある一致が生み出されていきます。

しかし、それは、決して自動的に起こることではなく、神の子どもたちが「すべての聖徒のために」祈り続けることの中で実現していきます。この点で、「すべての聖徒のために」祈り続けることと、父なる神さまの「みこころの奥義」が実現することを祈り求めることは深く結び合っています。

\*

パスカルは、『パンセ』の中で人間のことを「考える葦」と呼びました。そのことを記す断章三四七と三四八では、次のように言われています。

(三四七)

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たと

い宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならぬのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。

(三四八)

考える章。

私が私の尊厳を求めなければならぬのは、空間からではなく、私の考えの規整からである。私は土地を所有したところで、尊厳を増すことにならないだろう。空間によっては、宇宙は私をつつみ、一つの点のようにみこむ。考えることによって、私が宇宙をつつむ。

(前田陽一、由木康訳)

パスカルは、人間は考えることによって宇宙をつつむ。そして、そこに人間の尊厳性があると述べています。まさに、そのとおりです。

しかし、神の子どもたちは、祈りにおいて、それを越えた人間の尊厳性を表わします。神の子どもたちは、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められる

という父なる神さまの「みこころの奥義」の実現を祈り求めることにおいて、造られたすべてのものが「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられ」ることを願います。そして、そのように祈ることをとおして、全被造物の回復に関わる父なる神さまのご計画の実現に参与します。

ですから、私たちも、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた贖いの完成とともに、父なる神さまの「みこころの奥義」が実現する条件はすべて整えられていることを心に留め、目を覚まして「すべての聖徒のために」祈り続けたいと思います。